

## 宇宙旅行記

—生命と環境6「惑星地球の科学」レポート—

1220217 理学部物理学科1年 野澤恵理花

実習の日は、  
「ね、寝坊したー!!!!」  
の叫びと共に始まった...

「...もうっ！何で起こしてくれなかったのよ！」

茗荷谷スペースポートへの道を走りながら、私は「ちくわ」に文句をぶつけた。ちくわは円筒形をしたボディの下の車輪を忙しく転がし、私の後をついてくる。

「何度も起こしたよ！全然起きなかったんだから～！」

私の文句にちくわは反論する。彼は学習補助ロボットであり、私のパートナーだ。概形はR2-D2のようで、ちょこんと被るニット帽がなかなか可愛いが、私にはちくわが服を着て歩いているようにしか見えないので、「ちくわ」と呼んでいる。帽子の下のディスプレイには、2つの点と1本の線で表現される顔が映し出され、今は、呆れた顔をしていた。

「そもそも、君が全然寝なかったのがいけないんじゃないか！」

「う、うるさいな！しょうがないでしょ、今日の実習、ずっと楽しみにしてたんだから！」

そう、今日は待ちに待った実習の日。LA「惑星地球の科学」の締めくくりとして、講義の中で扱われた様々な天体へ実際に行き、観測を行うのだ。写真でしか見たことの無い天体を、生で拝めるなんて！しかも、観測に利用する宇宙船には、ワープ機能や多波長領域が観測可能な望遠鏡のみならず、タイムマシン機能までついている。100億年にもわたる星の歴史を一瞬の内に見ることだって可能なのだ！胸が高鳴らないはずがない。そういう訳で、興奮を抑えきれなかった私は、昨夜、2001年に宇宙を旅するSF映画を鑑賞したり、地球の命運を懸けて宇宙戦艦が大宇宙へ繰り出すアニメを見たりと、すっかり夜更かししてしまったのだ。

「まあ、楽しみにしているのはいいことだけどね。でも、アニメ見て寝坊なんてね～...。」

「イメトレよ。波動砲で恒星から噴き出したプロミネンスを撃つことになるかもしれないじゃない！」

「...いや、それ、どんな状況だよ！」

そんな会話をしている内に、茗荷谷スペースポートに辿り着いた。ドーム型のポート内は、朝のラッシュ時間帯を過ぎているせいか、いつもより閑散としていた。重役出勤のおじさんや、つなぎ姿の作業員を追い越し、手近にあるスペースポッドに駆け寄る。

グシャ

何か紙を踏んづけた音がした。どうせ広告のビラが何かであろう。今はそれどころじゃない。白い球状のポッドの前には、幸い、誰も並んでいなかった。大きく開いた円形のドアからポッドに乗り込むと、私は息も絶え絶えに、ちくわに確かめた。

「ハア...えっと、まず火星...ハア、に行けばいいんだよね？ワープテストも兼ねてとか...。」

「そうだよ。火星のブラッドベリ・スペースポートが集合場所。そこで、先生が実習前の注意事項等の説明をした後、出発する予定だよ。」

「よしっ、じゃあ、ワープ先をそこに設定して...。」

コクピットに座り、肩と腰のシートベルトを着用すると、目の前の中空にA4サイズのコマンド選択パネルが現れた。いくつもの項目の中から『ワープ』を選び、行き先を指定する。

「えーと、太陽系第4惑星火星...ブラッドベリ・スペースポート...っと、よし、設定完了！ワープするよ～！」

『確定』のボタンを押した。その瞬間、

「おーい！そのポッド、待ってくれー！！」

ポッドの外から慌ただしい声が聞こえた。正面の大きな丸窓に目を向けると、こちらに大股で駆け寄る作業員の姿が見えた。かなり切羽詰まった顔をしている。

「張り紙を見なかったのかー!? そのポッドは今、修理中なんだー！正常に動作しないんだよー！！」

「「な、何だってー!?」」

驚愕する私とちくわ。しかし、時すでに遅し。コマンドを受理したポッドは、ふわりと浮かび上がった。窓の外を一枚の紙がヒラヒラと横切っていく。そこには、「故障中。ワープ機能等に異常あり。」の文字が。... さっき、踏んづけた紙って、これ!?

「いいかー！間違っても、ワープ機能は使わないよー！それから、...機能も...！」

遠ざかっていく作業員の声。

「ワープまで、あと10...9...」

無情にもカウントダウンを始めるポッド。

「ち、中止！コマンド取り消し...！あれっ取り消せない!？」

パネルを必死に操作するちくわ。その様子を呆然と眺めながら、私は強く思った。

「3...2...1...ワープ！」

夜更かしなんて、するんじゃないかった...

ポーン

「ワープ完了。目的地に到着しました。」

緊張感のないサイン音と共に、アナウンスが流れる。同時に、体がふっと軽くなる感覚がして、重力の弱い場所へ来たことが分かった。急いで辺りを見回すが、ポッドの中は静かなもので、異常を知らせるランプの点滅も無い。...どうやら、無事に火星までワープできたみたい。私は胸を撫で下ろした。

「...?でも、窓の外が真っ暗な気が...。」

ガクンッ

「うわっ!？」

突然、強い衝撃がポッドを襲った。船体がぐらりと大きく傾き、シートに固定された私の体も一緒に振り回された。体を押しつぶされそうな加速度に息が詰まる。一体何が起きたのか。訳も分からないまま、ひたすら加速に耐えた。幸い、ポッドの自動姿勢制御装置がすぐに作動し、大きく傾いていたポッドは、徐々に正常な姿勢へと戻っていった。...た、助かった。一息ついたのも束の間、今度はちくわの

「ええっ!」

と言う叫び声に飛び上がる。横を見ると、ちくわはコマンドパネルを前に、固まっていた。

「...今、ポッドの位置情報を確認したんだけど...。とりあえず、これを見て。」

ちくわの言葉と共に、ポッドはゆっくりと向きを変えていった。先程まで暗闇しか見えなかった窓いっぱい、1つの輝く星が映し出される。茶褐色の美しい横縞。その姿は紛れもなく、太陽系で最大のあのガス惑星だ。

「こ、これって...！」

「...うん。どうやら、ボクたち...。」

顔を見合わせる私たち。ふと、昨夜見た SF 映画の内容を思い出した。ディスカバリー号も HAL9000 と、この星の探査に行ったような...

ポーン

「木星の強力な重力により、一時的に姿勢制御が困難となりました。現在は正常に飛行しております。」

「...火星、通り越しちゃってるじゃん!!」

私の渾身のツッコミが、ポッドの中にこだました...

散々ポッドに文句を言った後、私たちは、少しだけ木星を見ていくことにした。どうせ既に遅刻している身なんだし、もうちょっとくらい遅れても大丈夫だろう。というより、せっかく目の前に木星があるのだ。堪能しない手はない。いつも小言を言うちくわが賛成してきたのには驚いたが、やっぱり、木星の魅力には勝てなかったのだろう。

「...それにしても、綺麗な縞模様だよねえ。」

私はしみじみと言った。これが地表ではなく、雲の層だと知った時には驚いた。確か、赤道付近の風速は100m/s。地球でそんな突風が吹いた日には、家の屋根どころか、家ごと吹き飛ばされてしまいそうだ。

「...もう少し近付いたら、雲の流れる様子も見えるのかなぁ？」

私の呟きに、ちくわは、たしなめる様に言ってきた。

「言うておくけど、これ以上近付くのは危険だからね。この辺りは元々、木星の重力のせいで不安定なんだ。故障したポッドで近づける場所じゃない。ワープしたばかりで、エンジンも消耗してるはずだし...。」ちくわのディスプレイにポッドの現在位置が表示される。木星からの距離は、6万 km 程度。随分と木星の近くまで来たものだなあと感じつつも、木星が及ぼす重力を簡単に求めてみる。ポッドにはたらく重力加速度は、およそ...

「さ、3.5G...。」

実際に計算してみると恐ろしい数字だ。先ほどの大きな衝撃を思い出し、ブルリと身震いした。...危ない橋を渡るの止めておこう。

「じゃあ、ここで我慢するかな、っと。」

コマンドパネルを使い、窓をスクリーンモードに切り替えた。大きな画面いっぱいに拡大された木星の様子が映し出される。

「すごい！縞模様がこんなにハッキリと！」

とはしゃぐ私に、

「ホントだ、キレイなもんだね〜。」

とちくわも笑顔で頷いた。細い縞や、幅広の縞。白や、茶褐色、白斑を多く持つものなど、縞模様の1本1本が実に個性的で、それらが幾重にも重なって、織りなす模様は、まさに自然が生み出した芸術品だ。

「...確かこの模様って、緯度で風の向きが互い違いになっているせいで出来るんだよね。」

講義の記憶を引っ張り出しつつ、私は言った。木星は自転周期が約10時間と非常に速い。その為に強力なコリオリ力が生まれ、このような風の流れを作っているのだとか。地球の偏西風や貿易風のようなものが、狭い幅で発生している様子を想像すればいいのだろう。ふと、南半球に目を向けると、大きな渦が見えた。周りの白斑と比べても、飛び抜けて大きい、赤い渦だ。

「ちくわ、見て！大赤斑！」

「お、ホントだ。大きいね！」

「地球2、3個分の大きさがあるのよね。すごいなあ。」

縞と帯の境目で、300年以上も安定的に存在し続ける、巨大な渦。何故そんなことが可能なのか。そのメカニズムは、未だに解明されていない、そう先生は言っていた。台風のようなものであるとか、いくつかの白斑が合体・成長することで、今のような巨大な渦になったとか、説は様々だ。大赤斑、意外と奥が深いよなあ...。そんなことをボーッと考えていると、ちくわが声をかけてきた。

「...そろそろ行かないと。さすがにマズインじゃないかな？」

「え？もう、そんな時間？って、うわっ！」

ちくわのディスプレイに表示された時刻は、遅刻の記録をさらに30分も更新したことを示していた。

「し、しまったー！ついつい長居しちゃったよ...。」

慌ててコマンドパネルを引き寄せ、『ワープ』の設定を始めたところで、ふと、あることを思い出した。操作していた指が止まる。

「どうしたの？早く行かないと！」

急かすちくわに、私はにっこり笑いかける。

「...ねえ。ガリレオ衛星って、木星の衛星だよな？」

「え？うん。木星の衛星の中でも、特に大きな4つの衛星のことをそう呼ぶけど...。ま、まさか。」

ハッとしたちくわに、私は笑みを深めて言った。

「せっかくなんだし、ガリレオ衛星も見ていこう！」

「ええ...。さすがにこれ以上遅刻するのは...。」

「じゃあ、2つ！2つだけでいいから！」

渋るちくわに私は必死をお願いした。

「って、2つは見るんかい。」

とちくわはツッコミを入れながらも、しょうがないなあと最終的にはOKしてくれた。

「遅れついでに補足するとね、ガリレオ衛星は、1610年にガリレオが自作の望遠鏡を使って初めて発見したんだよ。そして、ガリレオ衛星の動きを観測したことが、地動説を裏付ける根拠の1つになったんだ。」

「へえ！そうだったんだ。」

ちくわの豆知識を聞きつつ、選択途中だった『ワープ』を取り消し、代わりにスクリーンに2つの衛星を映し出した。

「おお...！」

イオとエウロパ。木星の2つの衛星が、目の前に現れた。噴火口だらけの黄色い星と、滑らかな地表に茶色い筋が走る青い星。地表に火山活動の跡が色濃く残るイオと、地表を横切る何本もの薄い筋が水の噴出を示唆するエウロパ。どちらも木星の潮汐力の影響を強く受けているのに、一方は火山活動、他方は海。同じ木星の衛星でも、こんなに違った様相を示すなんて。2つの星を見比べながら、私はそう思った。あれ？そう言えば、エウロパに水があるということは、生命が存在する可能性もあるということだよなあ...。

「そしたら、エウロパ人かあ...。」

「え、いま、何て？」

ちくわが怪訝な顔で聞いてきたが、私の耳には届いていなかった。ますます、ディスカバリー号じみて来たぞ...。いや、ディスカバリー号はエウロパには行っていなかったっけ？夢中で考え込む私を、ちくわが遮った。

「ほら！ガリレオ衛星も見たんだから！さっさと行くよ！」

「ええー。まだ半分しか...。ガニメデは？カリストは？せめて、ガニメデだけでも~！」

「行！く！の！」

有無を言わせないちくわの口調に、私はがっくり肩を落とした。渋々、コマンドパネルから『ワープ』を選び、行き先を火星のブラッドベリ・スペースポートに再設定する。『確定』ボタンを押す前に、私はもう一度スクリーンに木星を映し出した。雲を厚くまとう巨大な星は、先ほどと変わらない様子で悠然とそこにあった。満足した私は、コマンドパネルに向き直る。

「...頼むから、今度こそ、ちゃんと言ってよね...！」

祈るような気持ちで、私は『確定』ボタンを押した。

ポーン

「ワープ完了。目的地に到着しました。」

再び緊張感のないサイン音と共に、アナウンスが流れる。同時に、突き刺すような光が目飛び込んできた。防眩されているはずの窓越しにも眩い光に、思わず目を細める。薄く開いた目が捉えるのは、神々しいほどに白く輝く巨大な星。こ、これは...！

「「た、太陽...!?」」

2人の声が重なった。嘘でしょと、目を見開く私たち。またしても火星を遥かに追い越し、今度は太陽まで来てしまうとは！遅刻した身で、あるうことが、太陽系の中心に行き着いてしまった。このポッドは、一体

私たちをどこまで連れて行く気なのだろう...

「一生、火星に辿りつけない気がしてきた...。」

小さなプロミネンスが、黒点付近から噴き出る様子を見ながら、私は諦めの境地に達していた。このままあっちこっちと飛ばされ続けて、終いには、ワープ先で超新星爆発に巻き込まれるとか、はくちょう座のブラックホールに飲み込まれるとか...。最悪の事態なのに、ありそうと思ってしまう今の状況が恐ろしい。

「まあ、もう一度ワープしてみようよ。次は大丈夫かもしれないよ？」

「かもって...。」

ロボットの口から、かもは無いでしょう。無茶な励ましをしてくれるちくわに苦笑しつつも、コマンドパネルから『ワープ』を選択し、行き先を指定する。この作業、今日何回目だっけ。思わず、ため息が漏れる。やっぱり、夜更かしなんかするんじゃないかなあ、せめて映画だけにしておけば良かった。ポイントのずれた反省をしながら、『確定』ボタンに指を近づけた、その時だ。

ビーッビーッビーッ！

「だぁー！今度は何っ!？」

警告音がポッド中に響き渡った。天井の赤いランプが点滅し、壁や床が真っ赤に染まった。コマンドパネルを見るが、まだ『確定』ボタンは押されていない。じゃあ、一体何が？戸惑う私に、ポッドは警告を発する。

「緊急事態！緊急事態！巨大プロミネンス発生！巨大プロミネンス発生！回避できません！」

「「な、何だってー!？」」

窓の方へすっ飛んでいくと、眩く輝く光球から巨大な火柱がずずずと立ち上がってくるのではないか！柱というより巨大な建造物のようなそれは、すでにポッドを軽々と呑み込める大きさに成長していた。アナウンスはさっき巨大プロミネンスと言っていた。きっと、後で、ニュースになったりするのだろう。そして、その現場に立ち会えた私は、幸運な人間に違いない。...今からそこに突っ込むのであれば、

「何で今日に限ってえー!!」

ああ、よく見れば、黒点がたくさん...。どうりで太陽活動が活発な訳だ...！妙に納得してしまう私。ポッドは、無慈悲にも、プロミネンスに向かって一直線に突き進んでいく。私は横のパートナーに助けを求めた。

「ちくわ！なんとかして！」

「ええっ!？無茶言うなあ！」

プロミネンスは、目前に迫ってきていた。感じるはずの無い熱がじりじり肌を焦がしていく。まさか、私の人生、もうこれで終わり？うう、来世は夜更かししない人間になります...！私はぎゅっと目を瞑った。

「もうダメ...！」

ポーン

「...砲、発射モードへ移行！」

「...え？」

気の抜けた音と共に、ポッドに異変が起こった。円形だったボディーは瞬く間に姿を変え、艦首に発射口のついた、立派な戦艦スタイルになった。ど、どこかで見たことがあるような...

「エネルギー充填、開始！10、...、20！」

「ターゲットスコープ、オープン！電撃クロスゲージ、明度20！」

どこかで聞いたことがあるセリフと共に、やはりどこかで見たことがあるようなターゲット・スコープとトリガーが出現した。思わず、トリガーを握り締める。昨日見た、アニメのセリフを思い出す。た、確か、目標の名前を言えればいいんだよね...！

「も、目標、巨大プロミネンス！相対距離、えっと...め、目の前！」

「エネルギー充填、80、90、...、120%！」

「対ショック、対閃光防御！」

窓には減光フィルターがかかり、私はどこからともなく現れたゴーグルを装着する。照準を合わせ、そして...！

「は、波動砲、発射ーっ！」

掛け声と一緒に、私は思いっきりトリガーを引いた。圧縮されたタキオン粒子が一気に開放され、発射口から青白い閃光となって、プロミネンスを撃ちぬく。一瞬の内に、火柱には巨大な穴が開いた。貫通した穴の向こうに、真っ暗な宇宙が覗く。

「今だー !! 突っ込めー !!!」

ポッドはぐんぐん加速し、なんとか大穴の中をくぐり抜けた。船尾が穴から抜け出した瞬間、穴があった場所は、紅炎に飲み込まれた。

「た、助かったー...！」

私はその場にへたり込んだ。もうダメかと思った...！ちくわが驚いた様子で目を白黒させていた。

「まさか、本当にイメトレが役に立つとは...！」

「だ、だから言ったでしょ？」

私も本当に波動砲が撃てるとは思ってなかったけど。というか、何でこのポッド、波動砲が使えるの？波動エンジン？

ポーン

「巨大プロミネンスにより、広範囲でフレア発生の可能性があります。大至急、退避して下さい。」

「こ、今度はフレア!? もう勘弁してよ！」

私は大急ぎでコクピットへ戻ると、『ワープ』の設定をし、『確定』ボタンを押した。

「ええーい！早く行っておしまいー！」

「ワープ完了。目的地に到着しました。」

本日3度目のアナウンス。窓の外には、果てしない大宇宙と、じゃがいも型の小さな星。

「ど、どこよ、ここ!？」

うなだれる私。3度目の正直にはならなかったようだ。...いや、待てよ？このじゃがいも、どこかで見た覚えがあるような？

「ち、ちくわ！これ...！」

「うん、フォボスだ！火星の衛星だよ！ボクたち...遂に、火星に、辿り着けたんだ！」

私たちは手を取り合い、がっすり抱き合った。3度目の正直だった！ありがとう！フォボス、ありがとう！名前覚えてなかったけど！

「さあ、早く行こう！もう大遅刻もいいところだよ。」

ちくわの言葉に頷き、進行方向を火星に設定すると、ポッドはぐるりと向きを変えた。赤い星と目が合う。北半球はなめらかな地表、南半球はクレーターだらけのゴツゴツした地表。特徴的な地形は、間違いなく火星だ。火星、なのだが...

「み、水...!？」

水の惑星になっていた。火星の地表を覆うそれは、紛れも無く水に見える。赤い大地と青い大洋のコントラストが美しい。ポッドの降下と共に、地表の様子が見えてきた。赤い大地には、大洋へと注ぎ込む大河の流れが、深い峡谷を刻み、そこへ流れ込む無数の滝が、日の光を浴びて虹色に輝いていた。

「きれい...。」

夢見心地のまま、吸い寄せられるように窓の方へ近づくと、

ポーン

「...完了。」

そのアナウンスと共に、水の惑星は跡形もなく姿を消していた。代わりに現れたのは、いくつものポッドが泊まる火星の発着場。ブラッドベリ・スペースポートだった。

「見間違いだったのかな...？」

と私が戸惑っていると、ちくわがあっと声を上げた。

「火星は、昔は、水があったかもしれないって言われているんだ！もしかして、今のは...！」

「じゃあ、今見たのって、昔の...!？」

驚き、互いの顔を見合わせる私たち。

ポーン

「ご搭乗、ありがとうございました。」

「ほら、早くしないと！遅刻だよ、遅刻！やっと辿り着けたんだから！」

「ああ、そうだった！急がなきゃ！」

私たちはポッドを飛び出した。

ブラッドベリ・スペースポートでは、先生が説明を終え、まさに宇宙旅行へ出発するところだった。ギリギリ間に合ったみたい。息を切らしながら、私とちくわはハイタッチした。

「それでは、皆さんお待ちかねの宇宙旅行へ、これから出発します。今日最初の訪問先は、ちょっと予定を変更して、先ほど、巨大なプロミネンスが確認されたという、太陽から...。」

「ええっ！また太陽...!？」

おしまい